

種類

者也。

〔倭訓栞前編十四〕たけ○中 雄竹をから竹といふ、常の竹也、雌竹をみがこといふ、後まで反つたり。業平竹は雄竹にて、節は雌竹のごとし、よて名く、箱根竹は細長し、品川竹は川竹の如し、薩摩竹は雌竹の品兼好竹は竹うるはしく、葉ものびやかなる物也、三股竹は武藏足立郡芝村にあり、實竹あり、よなしとぞ、又節一つにて段々まきあげたるあり、美濃高須の南かちあひといふ所の八幡の社内に豊竹あり、圍四五寸もあり、寒竹の大なる如し、八月筍を生ず、當摩のまんだらにつきたる軸、一節一丈餘あり、今洛東の禪林寺にあり、こは南廣の簣竹なるべし、葉竹は淡竹、真竹は苦竹、土用竹は鳳尾竹、鳳凰竹ともいふ、筍を生ずる三伏にあり、南京竹は義竹、玄ゆろ竹は櫻竹、金竹は對青竹、島竹は黃金間碧玉竹、淡竹と呼は秋蘆竹、玳璫竹、班竹、箭竹の稱は和漢同じ、漢竹可爲桶斛者は豊後より出、黒竹は薩摩にあり、和漢の稱同じ、鴟竹如蘆葦といふ者も和漢同じ、布袋竹は佛面竹、觀音竹、和漢同じ、四方竹は方竹也、乳兒竹は山白竹、根篠は千里竹、かゑろ竹は皮白の義、簾竹也、翁竹あり、葉に島あり、雪竹の類也、夜叉竹あり、北地に出、一節ごとに四方に枝さし出る竹は吉野竹林院にあり、孟宗竹は近年渡來す、對青竹は美濃にあり、一節に兩方に枝さすふたまた竹は天親竹也、紫竹を竿などに忌は、湘浦の故事によれりと埃囊抄にみへたり。

古今要覽稿草木

竹中略

すべて竹の舊より歌によみ來りしを、おほよそに集めて書亥るせしは、八雲御抄を始とす、それより下りては和漢三才圖會大和本草等をのく、その種類を載るといへ共、僅に十餘種なり、本草一家言に至り、頗る増補ありといへども、いまだ穿鑿を遂ざるを以て、大略二十餘種に過す、そもそも竹は皇朝固有の物といへども、また近時海外より渡りこし物も多し、今を以てこれを見れば、その種類殆百種にも近かるべし。